

「喜寿」を迎える感慨

この3月に「喜寿」を迎えます。77歳。よくここまで無事故で元気でやってこられた、との深い感慨が湧いてきます。というのも現役時代も定年後も、海外取材や滞在が多かったため、いろんなところで危うく難を免れた場面に何回も遭遇してきたからです。

多くの危険遭遇や失敗を乗り越えて

現役時代、ニューヨークのケネディ空港から市内のホテルに行くとき、旅には慣れているつもりの方が、あまりにも巧妙な白タクに騙され法外な料金を請求された。ふつう50ドルで済むところを200ドル請求されたのです。しかも車には途中から屈強な男が乗ってきた。指示に従わざるを得なかった。もし拒んでいたら、遠くに連れ去られ身ぐるみ盗られたか、誘拐みたいな状況になったかもしれない。

一方で自分のうっかりミスもありました。「ニューアーク」と「ニューヨーク」の空港を間違えたことです。パナマからの帰路ニューヨークの友人を訪ねる予定があり、インターネットで最安値のフライトを探していたところ、パナマ——ニューアーク——成田、という格安便が見つかりました。



“これは見つけもの”とネットで購入。パナマ空港で出発手続きをしていたときも、「ニューアーク行き」との掲示があったのに、「きっとニューヨークの間違いだらう」と余気にも留めずに乗り込んだのです。ところが、搭乗機がニューヨーク近く（の筈）になってのアナウンスを聞いて驚愕したのです。「機はまもなくニュージャージー州のニューアーク飛行場に着陸します」。「エッ！ ニュージャージー州？ ケネディ空港はニューヨーク州ではなかったのか？」。土壇場で気が付いたことは、ニューアークという空港があること自体を知らなかったこと。ニューヨークの間違いだらうと勝手に思い込んでいたのです。ネットで旅行社から送られてEチケットをプリントしたときも、「ニューアーク」との文字を見たのですが「きっと、『ヨ』と『ア』のうっかりミスではないかな」なんて思っていた。なんとした恥ずかしい不勉強！ なんとした大誤解！



それでも、50州もある広大なアメリカでニュージャージー州がニューヨーク州の隣りで、ニューアーク空港もニューヨーク市から遠くないところにあったことが天の助けでした。空港からニューヨークの中心街・タイムスクエアまでタクシーで駆けつけた。結果オーライではあったものの、それにしても、不勉強と甘い意識による一字の読み違えが、とんだ災難を引き起こす直前だったのに心からの安堵の思いを抱いたものでした。

紛争の続いていたニカラグアやエルサルバドルでも、厳しい入国審査と反革命分子への警戒から、自分の動きが当局または反政府側のゲリラに監視されていた面もありました。検

問所では自動小銃を持った警備兵に何回尋問されたことか。思想や発言の自由が当たり前となっている、恵まれきた平和にどっぷりと浸かっている人には、ちょっと想像もできないこのような場面も世界にはあるのです。



また特派員として駐在していたパナマで、あまりの激務が数日間続いた最終日、空港から支局の事務所に車で戻るハイウェイで瞬間的に居眠りをしてしまったこともありました。もし気が付くのが数秒遅かったら大事故を起こしていたかもしれないと思うと今でも冷や汗ものです。そのほか、夜中に駐車場に置いた車の窓を破られ、音響装置の全てを外し持ち去られたことやカメラの盗難など、数多い小さな事件や事故への遭遇などもなんとか乗り越えてこられた。運がよかったと感謝の思いは尽きません。

定年後のうつを信仰を基軸に克服

もう一つは自分の健康です。一番の危機はスペイン留学から帰国した定年 3 年目にうつになったことでした。一時はいつ死んでもおかしくない状態にありました。一般に全快するのが難しいと言われるうつを一年弱で克服できたのは「守られた」という以外にありません。克服の根源の力は信仰にありました。今、仏教セミナー等でその時の体験を皆さんにお伝えしている次第です（詳しくは「ミニ自分史」をご覧ください）。

私が 35 歳で聖教新聞の海外特派員として派遣された 1976 年の頃は、男性の平均寿命は 71 歳でした。40 数年前の当時は現在のように海外情報も少なく、メールによる交信はおろかファクスさえありませんでした。パナマから東京への国際電話も交換手に申し込んでから。文字は日本語をローマ字で打ち込むテレックスが主流だったのです。“未開の地の果てのような国に行く”といった印象と意識から、私は自分の年齢と当時の平均寿命をもとに心を定めていました。

「人生 70 年、ちょうど半分まで生きてきた。これ以上は命を捨てたと思えば何でもできる！」なんて。その決意はいろんな面で私の力にもなってきたような気がします。そして、その 70 歳を 7 年も超えて今生きていることを思うと、ひときわ感慨が深いのです。

目標は 2030 年、90 歳で P P K

これからは、創価学会創立 100 周年となる 2030 年を目指し、90 歳で P P K(ピンピンコロリ)を目標に、広宣流布(世界平和)への最大限の貢献と、お世話になった方々への感謝を伝えていきたいと願っています。

そのためにはまず健康管理。生まれ故郷の長野県は昨年、平均寿命で男性は僅差で一位を譲りましたが女性はトップを維持。当方は高校卒業と同時に上京したので、育った山坂の多い伊那谷の環境に近づけようと、古希を機に 1 日 1 万歩と団地マンション 7 階の自宅まで階段を上ることを始めました。



「老いは足から」——階段も“有用な健康器具”となります。天候に左右され 1 万歩に届かない日があっても階段は雨の影響を受けません。最初の頃は地上階にエレベーターが止まっていると「ラッキー！」と誘惑にか



られましたが、今は自然に足が階段に向きます。地上から 88 段。重い荷物のない限り挑戦しているところです。